

まずはじめに中ザワ先生の話聞いたとき、「方法」とはなんなのか、また何の意味があるのかさっぱりわからなかった。今でもはっきり言うと、よくわかっていない。しかし、中ザワ先生が「方法」を中心となって立ち上げたこと、そして現時点ではもう「方法」に基づいて芸術活動をしていないということはわかった。

雑誌「妃」を使用して講義は進められていく。まず中ザワ先生はどのような考えを持って「方法」へと至ったのか、どのように結成されたのか、など。私は恥ずかしながら本当にちんぷんかんぷんで、どう質問すればよいかどうかもわからないほど先生の考え方を理解できず、素直に受け止めることができなかった。しかし、先生の「方法主義とは、目的までを目指しその目的を達成することに重点を置くのではなく、その目的を達成するまでの過程、つまり方法に重点を置いている」という説明でなんとなくではあるが「方法」について少しわかった気がしてきた。

あくまでも私の解釈なので先生から見たら間違った解釈かもしれないが、芸術家、詩人、音楽家それぞれが集まり、各専門分野を研究するのではなくその3分野が融合することは今までにない独創的なものであり、結果ではなくその過程に面白みがあるのであろうと思った。なかでも印象的だったのは第一回方法芸術祭で行ったと話していた「方法カクテル」である。美術側からは絵の具を使用しない色彩混合、文学側からは主語、述語、音楽がわからずは音響を使用しない和音を問題としてとりあげているようで、確かによく考えてみると3つともが共有し総合的なものになっていることに気づかされ、こんなことを考え出すことができるのかと講義を聞いて思った。

しかし、そんな考え方があるのかと感心させられる一方で「方法主義第二宣言」作成における対立の原因などにおいては中ザワ先生がおっしゃっていたとおり、ただでさえわかりにくい「方法」であるのにそこに対立が生まれるなど申し訳ないが本当に理解できなかった。とにかく「方法」を確立するために集まる人はみなそれぞれ自分の意見、考え、芯を持っておりそれを融合させることでまた新たな総合芸術が生み出されるのではないかと私は思った。

講義を通して「方法」のような目的ではなく過程を重視する考え方も面白く、自分の中に新たな思考回路が組み込まれたような気がした。